

# 季刊せいてん no.137

●浄土真宗聖典の学習誌●

特集

「文殊小僧」と呼ばれた男

「玄智とは何者だったのか？」



江戸時代の庶民的な仏教書とお説教 / 江戸後期の勸化本 幸せてなんだろう / 仏教と情報化社会  
「恵信尼消息」 / 言葉にできない思い 「蓮如上人御一代記聞書」 / 仏法は聴聞にきはまる

# 法語随想④

本願寺派布教使

四夷し 法顯ほうけん

この身みは、いまは、としきはまりて候そうらへば、さだめてさきだちて往生おうじょうし候そうらはんずれば、浄土じょうどにてかならずかまらざるまぢまらせ候そうらふべし。

〔親鸞しんらん聖人御消息しょうそく〕七八五頁

（わたしは今ももうすっかり年老いてしまい、きつとあなたより先に往生するでしょうから、お浄土でかならず、かならずあなたをお待ちしております。）

お浄土でかならず、かならずあなたをお待ちしております。

親鸞聖人の慈愛に満ちたお言葉です。このお手紙を受け取ったご門弟の有阿弥陀ゆうあみだ仏は、感涙かんでいにむせんだことであらうと思います。そもそも「かならず」とは、そうでないことが想定不可能な際に用いる言葉で、いまだ実現していない未来に対しては、厳密には用いることができません。人間の営みの

中で「かならず」と言い切れるのは「生まれてきた者はかならず死ぬ」ということぐらいで、それ以外のことは不確

実性が付いてくるからです。では聖人はご門弟に対して、同じお浄土に生まれ往くという未来の必然性をなぜ言い切ることができたのでしょうか。それはお浄土へ生まれ往く因も、お浄土で仏のさとりを得る果も、すべて阿弥陀さまの元ですでにご用意され

ていたことを、いま聞こえている「南無（まかせよ）阿弥陀仏（われに）」によって知らされたからでありましょう。聖人は、その阿弥陀さまの確かなお救いが届いている。いま、を、ご門弟と共有されている思いがあったからこそ、「かならず、かならず」とお浄土での再会をお示しくくださったのだとい

\*

\*

二〇一九年に高校時代からの法友が、病によって三十三歳で往生しました。明るく、人懐っこい性格でよく楽しませてくれました。彼との出会いは高校時代に行った得度習礼で、本格的な付き合いが始まったのは京都の宗門校で再会してからでした。学生時代が終わり、お互い自坊へ戻ってから定期的に電話で連絡を取り合っただけで、義の話をしたり、たまに京都で会って食事をするような関係が続いていました。そうした中、半年ほど連絡が途絶えていて最近どうしているのかなと思っていた矢先、その友人から電話がありました。自分はいまステージⅣのガンを、病院から自宅に戻って療養しているという耳を疑うような話でした。

数日後、私は友人が住職を務めるお寺までお見舞いに向かいました。比較的しつかりした体格は以前より痩せていましたが、いつもと変わらない人懐っこい笑顔で出迎えてくれました。限られた時間の中で、昔の思い出話やご法義話ができました。すると友人がふと、「最近布団の中で横になつていて、よくお念仏するようになつた」と言うのです。もしかすると、受け入れ難い現実にいる自分を包み込んでくださる阿弥陀さまの温かさを、お念仏の中に感じていたのかもしれない。そこで私が「一緒に阿弥陀さまの前でお勤めをしないか」と提案すると、友人は本堂へ案内してくれました。私が調声で、友人がお連れ合いと後ろに座り、三人で「重誓偈」のお勤めをさせていただきました。お勤めが終わり、最後に小さく「なんまんだぶ、なんまんだぶ」と、友人のお念仏が背中に聞こえました。

その後、友人はお連れ合いの運転で私を最寄り駅まで送ってくれました。駅の改札で彼に「有難う」と手を差し出し、握手をして別れました。温かい手でした。その二週間後、往生の知らせを受けました。

一報を受けた時、思い出したのは本堂で一緒にお勤めをした「重誓偈」のご文でした。

われ仏道を成るに至りて、名声十方に超えん。究竟して聞ゆるところなくは、誓ひて正覚を成らじ。

(二四頁)

阿弥陀さまが法蔵菩薩であられた時、「南無阿弥陀仏が至り届かないところがあるならば、決して仏にならない」とのお誓いです。あの時、友人と私には「南無(まかせよ)阿弥陀仏(われに)」が届いていました。ともに阿弥陀さまのお慈悲を聞き、同じご信心を賜っているのであるならば、参らせたいだけのは同じお浄土です。だからこそ先立って往かれた方々とも、「かならずお浄土で会わせていただきます」と言い切ることができるのでありましよう。「かならず」という未来の必然性は、さわりなき救いのみ名を聞かせていただく。いま。によって開かれていくのです。

三回忌を迎えた今年、お念仏をいただく中で法友が待つお浄土を、以前より親しく感じるようになりました。

南無阿弥陀仏